

Ⅱ-11提供会員のおかげで、子どもの病
気への対処に関して不安が減った。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	219	22.79%
2. あまりない	299	31.11%
3. 時々ある	249	25.91%
4. よくある	144	14.98%
無回答	50	5.20%
合計	961	100.00%

Ⅱ-12提供会員のおかげで、子どもの精
神面が安定した。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	144	14.98%
2. あまりない	235	24.45%
3. 時々ある	351	36.52%
4. よくある	183	19.04%
無回答	48	4.99%
合計	961	100.00%

Ⅱ-13提供会員に、無理なお願いを引き
受けてもらった。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	168	17.48%
2. あまりない	193	20.08%
3. 時々ある	300	31.22%
4. よくある	253	26.33%
無回答	47	4.89%
合計	961	100.00%

Ⅱ-14提供会員に、プライベートなこと
を聞かれ嫌な思いをした。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	751	78.15%
2. あまりない	130	13.53%
3. 時々ある	27	2.81%
4. よくある	7	0.73%
無回答	46	4.79%
合計	961	100.00%

Ⅱ-15提供会員のおかげで、子どもの身
体面が安定した（病気や怪我が減っ

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	297	30.91%
2. あまりない	379	39.44%
3. 時々ある	162	16.86%
4. よくある	71	7.39%
無回答	52	5.41%
合計	961	100.00%

Ⅱ-16提供会員に、社会とのつながりの
大切さを、理解してもらえた。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	151	15.71%
2. あまりない	259	26.95%
3. 時々ある	313	32.57%
4. よくある	174	18.11%
無回答	64	6.66%
合計	961	100.00%

Ⅱ-17提供会員から、子育ては母親がす
べきものと言われた。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	811	84.39%
2. あまりない	78	8.12%
3. 時々ある	14	1.46%
4. よくある	12	1.25%
無回答	46	4.79%
合計	961	100.00%

Ⅱ-18提供会員から、効率的な家事や倭
約の方法について習った。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	550	57.23%
2. あまりない	217	22.58%
3. 時々ある	116	12.07%
4. よくある	29	3.02%
無回答	49	5.10%
合計	961	100.00%

II-19提供会員に、親としてだけでなく、社会の一員として認めてもらえた。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	243	25.29%
2. あまりない	263	27.37%
3. 時々ある	266	27.68%
4. よくある	130	13.53%
無回答	59	6.14%
合計	961	100.00%

II-20提供会員に、子どもが身内のようになつくようになった。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	751	78.15%
2. あまりない	130	13.53%
3. 時々ある	27	2.81%
4. よくある	7	0.73%
無回答	46	4.79%
合計	961	100.00%

II-21提供会員のおかげで、子どもに、挨拶などの礼儀作法が身についた。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	164	17.07%
2. あまりない	265	27.58%
3. 時々ある	326	33.92%
4. よくある	150	15.61%
無回答	56	5.83%
合計	961	100.00%

II-22提供会員のおかげで、家族以外の人と関わる機会ができた。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	80	8.32%
2. あまりない	111	11.55%
3. 時々ある	338	35.17%
4. よくある	382	39.75%
無回答	50	5.20%
合計	961	100.00%

II-23提供会員に連絡すればよいと思うと、孤立感を感じなくなった。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	124	12.90%
2. あまりない	198	20.60%
3. 時々ある	298	31.01%
4. よくある	293	30.49%
無回答	48	4.99%
合計	961	100.00%

II-24提供会員から、仕事と育児の両立をサポートしてもらった。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	191	19.88%
2. あまりない	115	11.97%
3. 時々ある	237	24.66%
4. よくある	364	37.88%
無回答	54	5.62%
合計	961	100.00%

II-25提供会員に、育児の悩みを聞いてもらった。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	194	20.17%
2. あまりない	237	24.64%
3. 時々ある	263	27.34%
4. よくある	217	22.56%
無回答	51	5.30%
合計	962	100.00%

II-26提供会員から、物事の見方・考え方を教えてもらった。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	240	24.97%
2. あまりない	274	28.51%
3. 時々ある	245	25.49%
4. よくある	151	15.71%
無回答	51	5.31%
合計	961	100.00%

Ⅱ-27提供会員に、子どもを預けることが不安になった。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	763	79.40%
2. あまりない	119	12.38%
3. 時々ある	19	1.98%
4. よくある	12	1.25%
無回答	48	4.99%
合計	961	100.00%

Ⅱ-28提供会員に、家事を手伝ってもらった。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	741	77.11%
2. あまりない	96	9.99%
3. 時々ある	50	5.20%
4. よくある	23	2.39%
無回答	51	5.31%
合計	961	100.00%

Ⅱ-29提供会員から、地域行事や地域活動への誘いを受けた。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	622	64.72%
2. あまりない	143	14.88%
3. 時々ある	110	11.45%
4. よくある	35	3.64%
無回答	51	5.31%
合計	961	100.00%

Ⅱ-30提供会員に、育児の方法を習った。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	356	37.04%
2. あまりない	236	24.56%
3. 時々ある	244	25.39%
4. よくある	69	7.18%
無回答	56	5.83%
合計	961	100.00%

Ⅱ-31提供会員やファミリー・サポート・センター事業は、いざと言うとき助けてくれる存在になった。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	32	3.33%
2. あまりない	35	3.64%
3. 時々ある	236	24.56%
4. よくある	608	63.27%
無回答	50	5.20%
合計	961	100.00%

Ⅱ-32提供会員とは、お金と託児を介したつきあいだけだ。

選択肢	度数	パーセント
1. 全くない	471	49.01%
2. あまりない	259	26.95%
3. 時々ある	104	10.82%
4. よくある	64	6.66%
無回答	63	6.56%
合計	961	100.00%

Ⅶ 単純集計〈親への調査票〉

4. 本事業に対する親の感想

〈要旨〉

本事業では、どのような支援がおこなわれているのだろうか。また、その中で、親はどのような経験をしているのだろうか。このことを検証するために、質問項目Ⅱに自由記述を設定した。回答は、586件あり、回答率61.0%であった。

結果は、本事業において支えられた経験があるという主旨の回答が70.87%（415件）、支えられるにはさらなる工夫が必要という回答が28.67%（168件）であった。

1. 問題状況

前述したように本事業は、年々設置箇所が増加し、また利用者も増加している。利用者の中には、会員登録しているだけで安心するという層もあれば、頻繁に利用する層もある。また、特殊な理由で利用しているケースもある。利用に関しては、各センターに規約があり、それに沿って展開されているのが原則である。

本事業では、どのような支援がおこなわれているのだろうか。また、その中で、親はどのような経験をしているのだろうか。

2. 選択肢の回答

ここでは、全国の利用者961名から調査紙を回収した。質問項目Ⅱの自由記述への回答586件あり、回答率61.0%であった。

そのうち事業によって支えられた経験があるという主旨の回答が70.82%（415件）、支えられるにはさらなる工夫が必要という回答（要望）が28.67%（168件）であった。

今年度は、詳細な分析までには至らなかった。詳細な分析は、次年度の報告とする。

VIII 海外調査

—多様な地域課題とボランティアによる子育て支援—

1. 本研究のアプローチ

1) 準専門家である地域ボランティアによる子育て支援

国内研究において述べたように、各家庭の個別ニーズに対応するファミリー・サポート・センターの取組は、親を育てる機能がある。

「育てる」というのは、別の視点から見ると、虐待や育児不安が起こってから対応する「対応型」ではなく、事前に予防する「予防型」と捉える事もできる。またこれまでの日本における保育や子育て支援サービスの多くが、「施設型」および「集団型」であったものと違い、ファミリー・サポート・センターの取組は、「家庭型」および「個別型」である。西郷氏は、これら後者のタイプ（筆者によれば「予防」および「ホーム・ビジティング」）が、こども家庭福祉領域さらに社会福祉領域における世界のトレンドだと指摘する¹。「これまでは児童虐待の際の危機介入に力を注いできたが、現在では問題の発生の予防や、早期介入・深刻化防止の方法に児童施策の重点が移動してきている」²という。そして著書『ホーム・ビジティングの挑戦』（2006年）において、準専門家であるボランティアによる支援活動の全体状況、およびイギリスの子育て支援政策とホーム・ヴィジティング、さらにイギリスを発祥の地とするホーム・スタート（NPO）の取組について言及している³。また筆者は、その理論展開だけではなく日本においてモデルの実践（ホーム・スタート・ジャパン）を立ち上げ展開している。ホーム・スタートの取組は、ファミリー・サポート・センターの取組と同様、家庭に専門職以外が入っていくことの漠然とした不安を乗り越え、現在、世界的に展開され、その効果も実証されている。

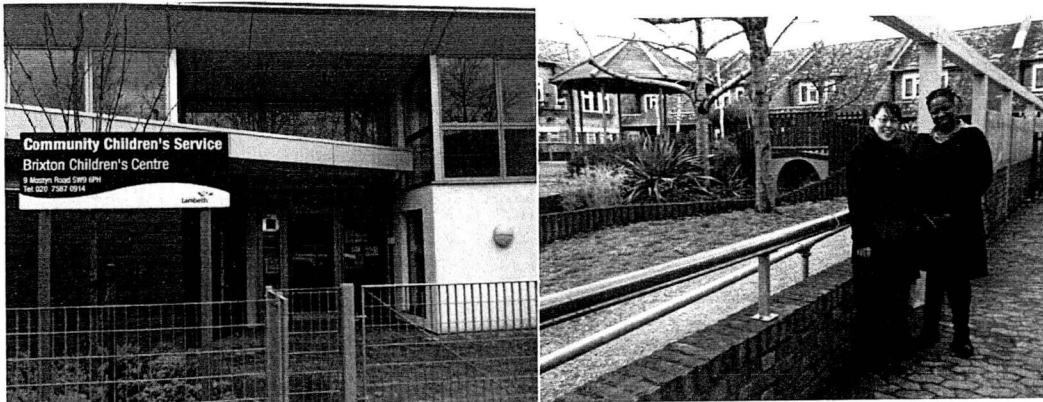
2) イギリスの子育て支援政策

先述したとおり、ホーム・スタートの概要およびイギリスの子育て支援政策（特にシュアスタート）については、西郷氏の著書『ホーム・ビジティングの挑戦』（2006年）に詳しい。イギリスでは、1997年の労働党政権以来、政策的に労働者の家庭支援が重視され、就学前教育も充実された。1999年からは、貧困地域の家庭・児童の環境向上を中心に生活や幼児教育を支援する「シュアスタート」（Sure Start）プログラムが開始され、その施設として、「就学前教育センター」（Early Excellence Centre）や「近隣保育施設」（Neighbourhood Nursery）などが導入された。2003年からは「チルドレンセンター」として施設の建設、専門家の設置がなされている。⁴イギリスでは、現在、「未来への投資」として、子育て支援にかなりの予算が投入されている。たとえば、今回の調査で入手した資料によると、ロンドン市ランベス地区（人口約280,000人、面積10.5 square miles）には、チルドレンセンタ

ーが 28 施設も建設されている。政府は 2010 年までに、イギリスの全ての家族が、家から歩いてベビーカーを押していける距離でサービスを受けられるように、チルドレンセンターを設置している。さらに地域の貧困度に応じて、その施設に、保育所や助産婦や言語聴覚士、栄養士、アウトリーチワーカーや、他の医療関係の専門家を施設に所属させている。多くのチルドレンセンターは、小学校に併設された。実際には、かなり多くの保育所が増えたことになる。見学したランベス地域には、インドやソマリア等、子どもを多く生む人種の移住者が多く、高齢者は少ないため、保育所の需要がある。次頁の地図を見ると、チルドレンセンター間の距離が、歩いて5分というケースもあることがわかる。ランベスの見学させていただいたチルドレンセンターは、非常に熱心で好評だった。しかしすべてのチルドレンセンターがそうではないようだ。現場からは様々な声を聞いた。チルドレンセンターの政策は、3年間限定の政策であり、3年後どうなるかわからない。また、「シュアスタートは、活動に対して委託という形で補助金がおりましたが、チルドレンセンターは施設建設中心に費用を投じているため、多様な活動への補助金が難しくなった」という。また昨今の不況のためか、地域によっては、あらゆるサービスを受けられる施設というよりも、単なる大きな保育施設にしかになっていない個所もある。そうになると、サービスを受けるために親は資金が必要なため、貧困地域にいる多くの親のニーズに応えられないという指摘もあった。

チルドレンセンターの当初の構想は、誰でもが行ける施設というコンセプトだったが、そうはなっておらず、逆にチルドレンセンターに行くことを怖がっている親もいた。利用者は、中流の親が中心であるという指摘があった。この意味で、シュアスタートから、チルドレンセンターになって、貧困地域への支援が難しくなっていることがわかった。本当に深刻な問題は、かかわっても、活動の効果がなかなか見えてこない。そうなる前の、「初期」の予防が非常に重要であるという現場の声が多かった。

<ランベスのチルドレンセンター>

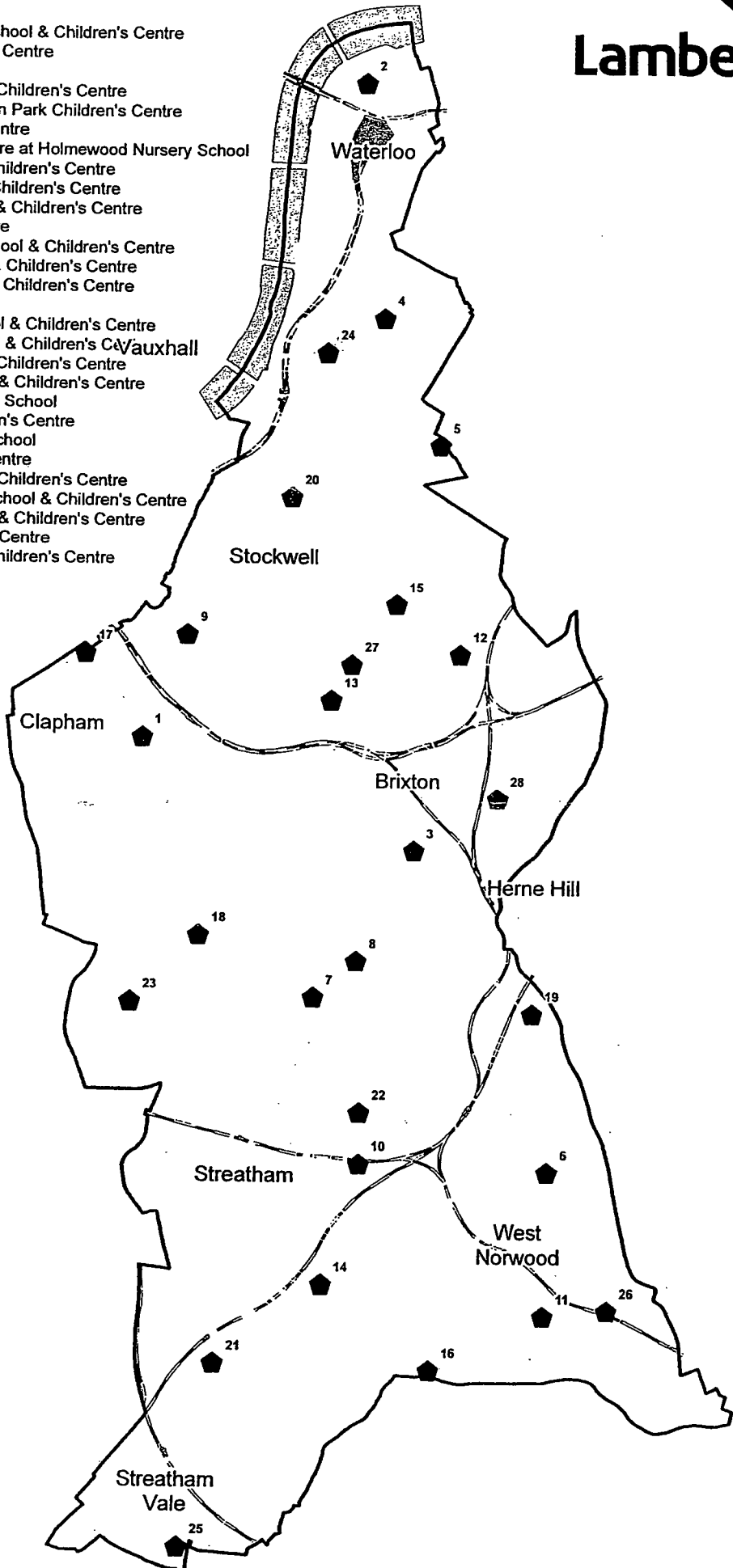


CHILDREN'S CENTRES



Lambeth

1. Clapham Manor Primary School & Children's Centre
2. Coin Street Neighbourhood Centre
3. Effra Early Years Centre
4. Ethelred Nursery School & Children's Centre
5. Henry Fawcett & Kennington Park Children's Centre
6. Barston Road Children's Centre
7. Tree House Children's Centre at Holmewood Nursery School
8. Jubilee Primary School & Children's Centre
9. Larkhall Primary School & Children's Centre
10. Hitherfield Primary School & Children's Centre
11. Little Starz Children's Centre
12. Loughborough Primary School & Children's Centre
13. Stockwell Primary School & Children's Centre
14. Sunnyhill Primary School & Children's Centre
15. Brixton Children's Centre
16. Crown Lane Primary School & Children's Centre
17. Heathbrook Primary School & Children's Centre
18. Vauxhall Primary School & Children's Centre
19. Maytree Nursery School & Children's Centre
20. Rosendale Primary School & Children's Centre
21. St Stephens C of E Primary School
22. 388 Streatham Hub Children's Centre
23. Streatham Wells Primary School
24. The Weir Link Children's Centre
25. Vauxhall Primary School & Children's Centre
26. Woodmansterne Primary School & Children's Centre
27. Kingswood Primary School & Children's Centre
28. Stockwell Park Early Years Centre
29. Jessop Primary School & Children's Centre



2. 本研究の課題

1) 準専門家による支援の可能性と課題

ファミリー・サポート・センターとホーム・スタートには、重要な相違点が2つある。

一つは、ファミリー・サポート・センター事業ではできない部分へのアプローチが、ホーム・スタートならばできる点である。無償だからこそ、貧困家庭が利用でき、また専門機関による「照会」を中心に展開しているからこそ、自分からは手助けを求めようとしない、深刻な家族とつながることができる点である。

二つ目に、専従職員以外、地域の無償ボランティアが担っているという点である。有償のコーディネーター以外、無償ボランティアが関わっていることで、予算規模にかかわらずサービスの拡充ができる。ただ、日本では、厚生労働省も指摘するように、無償ボランティアの継続性と責任の所在において課題や限界性が指摘されて久しい。さらにボランティア本人が「各家庭に入っていくという重責に堪えられるのか」と併せて、各ボランティアを支え、責任を放棄せず継続的に活動を展開するボランティア団体の運営のための財源の問題は、これまで日本のボランティア論が抱えてきた課題である。

このような可能性への着目と課題意識のもと、本研究では、ホーム・スタート発祥の地であるイギリスにおいて、これらがどのように捉えられ、克服されているのか明らかにし、日本の子育て支援を担うボランティアの可能性について言及したい。イギリスは、子育て支援サービス選択肢の多さや、すべての医療費無料など、日本とは多くの違いがあるが、参考になると考える。

2) 貧困および格差社会と子育て支援

今日の世界的不況に伴い、日本においても家庭さらには子どもの貧困が深刻化し、また親の就労状況、就労時間の多様化がすすみ、多くの支援が必要となっている。しかし、支援のために必要な財源も、自治体にはほとんどないのが現状である。このような状況において、地域ボランティアは頼もしい存在であるのだが、各地域の状況によって、ボランティア団体も様々な影響を受けている。この先行事例として、日本以上に格差が進行しているイギリスの事例は、今後の日本の方向性を考えるための参考になる。現在のイギリスは、貧富の格差が40年以上前の水準になりつつあり、さらに貧困層も富裕層もそれぞれまとまって居住する傾向を強めているといわれている。また昨年からのクレジット・クランチ（不況、ポンドの急落）は、より格差を進行させている。各地域の子育ての状況および支援の状況は、どのように違うのだろうか。

3. 調査方法・内容

1) 調査方法

ロンドン市の貧富格差のある5地域（カムデン、ランベス、イーリング、リッチモンド、

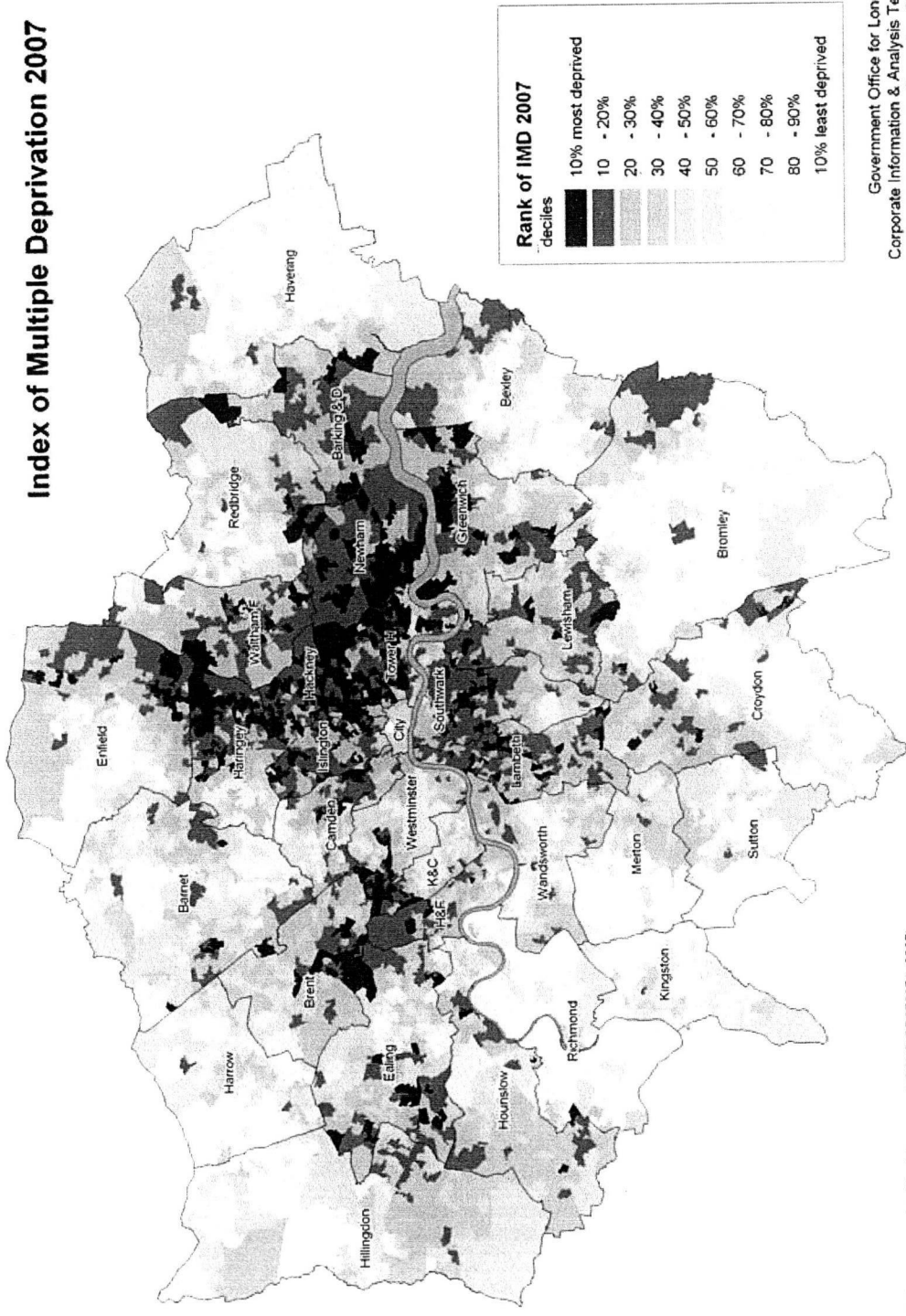
サザーク)にあるホーム・スタートを視察およびヒアリングする。以下の図と地図⁵は、イギリス政府が公表しているロンドン市の各地域の貧困度である。パーセンテージは貧困度を表しており、割合が高いほど貧困である。貧困度の指標は、Income (収入)、Employment (雇用)、Health Deprivation and Disability (健康の喪失や身体障害)、Education (教育)、Skills and Training (資格)、Barriers to Housing and Services (住宅供給やサービスの障害)、Crime (犯罪)、Living Environment (社会的・文化的な生活環境)という7つの要素から構成されている。調査地選定は、貧困度の高い地域と低い地域、中間の地域に調査依頼をした。調査に応じてくださった5団体に訪問した。

もともとロンドン市において貧困度の高い Hackney は、自治体が貧困なため、資金調達の目途が立たず、解散の危機に直面していて多忙なため訪問許可を得られなかった。政策的に、自治体はシユアスタートや、チルドレンセンターのいろいろな施設や活動に資金を使わなければならないようになったからである。またこれまで寄付をしてくれていたソーシャル・サービスも、2年前に、すべての子どもに対する支援への寄付へと意向を変えたため、恒常的な資金繰りの目途が立たなくなったという。今年もチルドレンセンターを通した限られた予算に頼っていたが、現在は、ボランティアの研修をするための予算の目途がたたなくなってしまったという。このようにホーム・スタートは、一定の基準を満たす各地域独立した組織であるため、各地域の状況によって、その運営はかなり違ってくるといえる。

<調査地 2009年2月9～12日>

貧困度 33 地域中	地域名 (スキーム名)	特徴	調査対象者
5位	Southwark (サザーク)	今回の調査地の中で、最も貧困度の高い地域である。	Co-ordinator, 2volunteers
7位	Lambeth (ランベス)	再開発地域を除き、犯罪が多発しており治安が悪い。	Scheme Head; Kathryn Beatham
12位	Camden (カムデン)	有名人が多く住む裕福な居住地がある一方、ドラッグ関連犯罪、売春地域としても知られている。	Co-ordinator; Rosemary Palmer
17位	Ealing (イーリング)	貧困度ランク中間。日本人企業駐在員の多く住む比較的裕福なエリア、大きなインド人街、平均的な住宅地である。	Co-ordinator; Louise
33位	Richmond (リッチモンド)	ロンドン南西に位置し、もともと裕福な居住地である。	Co-ordinator; Linda Haslam

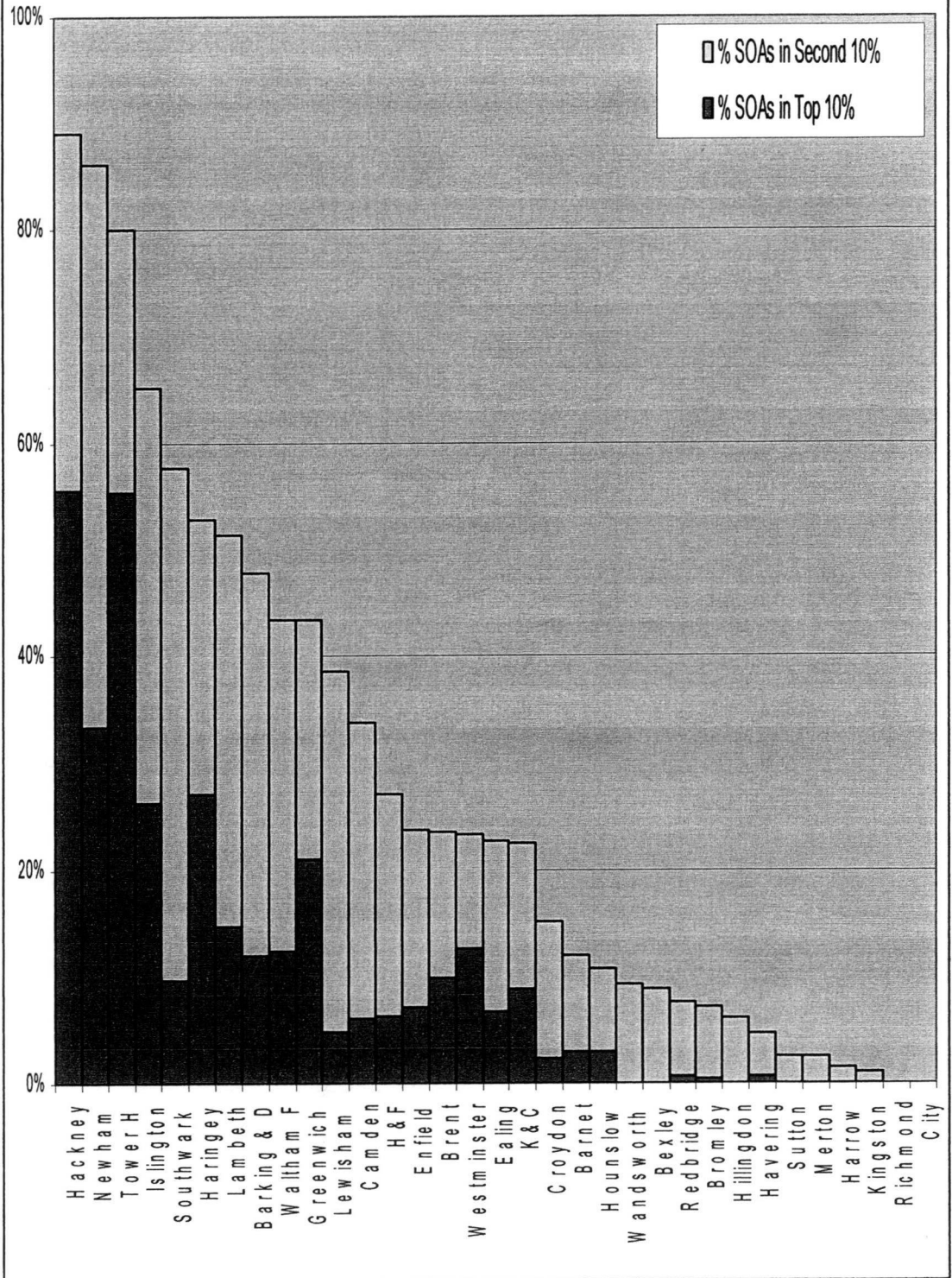
Index of Multiple Deprivation 2007



Government Office for London
 Corporate Information & Analysis Team
 December 2007

© Crown copyright. All rights reserved DCLG GD272671 (2007)

Index of Multiple Deprivation 2007
Proportion of SOAs in borough which are in the top 20% most deprived in England



2) 調査内容

聞き取りの柱は、以下の通りである。

- ①無償ボランティアの内実について（継続性と責任の所在）
- ②ボランティア団体の継続的な運営（特に財源の問題）
- ③地域および住民の貧富の格差がボランティア活動に与える影響について

調査の際、①～③の質問をそのまま問うのではなく、各スキーム（各地域組織）の現状と課題についてヒアリングしながら、①～③について考察する。

4. 結果・考察

4-1. Home-Start Southwark (ホーム・スタート・サザーク)

(Unit 126 Camberwell Business Centre, 99-103 Lomond Grove, London SE5 7HN
T:07940-021-816)

4-1-1) 概要

サザークは、ロンドン市の中心に位置し、市内33地区中で5番目に貧困度の高い地域である。

ホーム・スタート・サザークは、1995年に発足した。最初は、1人の呼びかけからはじまったが、現在はコーディネーターやボランティアを合わせて125名で活動している。ボランティアでもっとも多いのは、カリブ人やアフリカ人、ブリティッシュである。2007年から2008年にかけて155組の家族を支援した。しかし、他機関から照会された家族のうち30組が継続的な虐待やDV、トラウマによる精神的障害などの複雑なニーズをもっていたため、ホーム・スタートでは支援できなかった。また現在19組の家族が待機リストにのっている。また155組中、115組はひとり親家庭であり18家族の親は障害を持っていた。合計して401名の子どもを支援したことになり、そのうち307人は4歳以下である。家族の人種でもっとも多いのは、アフリカ人である。

2年前資金が足りなくなり、2人人員を削減した。資金は、毎年、毎回課題となる。メインの基金として、自治体からの補助金がチルドレンセンターを通して支払われる。他の団体へも、さまざまな資金を申し込んで寄付をもらっている。例年夏休みには、ボランティアと家族でコミュニケーションを図るため旅行に行っていたが、去年は、資金不足で行くことができなかった。2007年は、チルドレンセンターからの補助金が、£210,143から£161,403に減少した（約3000万円から約2300万円へ：£1=140円として。しかしグローバル経済の中、ポンドの価値はこの1年で約半減しているため額面よりさらに減収）。しかし、この地域にとってホーム・スタートの取組は非常に重要なものであるため、この活動の意義を理解してもらえるように努力している。

4-1-2) 地域の家族を支えるホーム・スタートの意義

サザークでは、出産後、当日病院を出て行ってしまふ母親がいる。男性も仕事を休めないことが多い。その時、母親は家で一人孤独になったり、産後うつになったりする。ホーム・スタートは、そのような母親の話し相手になる。孤独な母親は、自分が母親として失格、あるいは子どもをあまり好きではないという気持ちになってしまう。ボランティアは、そう思うのは、「いま」だから（いまの状態だから）であり、すぐに通り過ぎる、大丈夫だということを伝える。親は、実際に親になるまで、親になるトレーニングを受けてきていないので、どうふるまうて良いかわからなくなる。ボランティアは、そのような親を支える。また親は自分が子どものとき、親にふるまわれたように、子どもにふるまう。もし、親が子どもの頃虐待を受けていたら、それを自分の子どもに繰り返してしまう。親は、孤独で気分が落ち込んだとき、特に虐待しそうになる。そのため、ボランティアが秘密厳守で、継続的に親と関係を作り、信頼を得るようにし、完璧な親なんてどこにもいないことを伝える。問題を抱えた多くの親が、地域の人と関わりあうときに感じることは、自分が親としてだめだから、赤ちゃんを取り上げられ、一緒に暮らせなくなるかもしれないということだ。ホーム・スタートは、友達だから大丈夫だよ、ということ伝えて、孤独から救いだそうとする。また、ひとり親家庭も多く、孤立している。他にも出産後の母親のホルモンの状態を、父親はよくわからないので、母親だけに子育てを任せてしまう場合がある。この場合、母親は、自分の感情をどうしてよいかわからない。ホーム・スタートを利用することによって、親は、ボランティアに、そのような本音を打ち明けてくれる。母親は、早期に正しいサポートを受ければ、子どもへの虐待へエスカレートすることはない。

ただ、ホーム・スタートがサザークで活動しているからと言って、この地域の虐待が減ったわけではない。それ以上に、この地域には、非常に複雑な家庭が多い。複雑さの内実には、障害の問題（学習障害など）、ドラッグ、アルコール依存、精神的病気（躁鬱など）、難民、政治の問題、母国語の違い、ガン（深刻な病気）など、いろいろある。もちろん、活動することによって、虐待を予防できた実感することも多い。親は、ボランティアと話すとき、かなり深刻な問題を話してくれる。ボランティアは、ソーシャル・サービスと連携をとりながら、子どもだけでもチャイルドプロテクションプログラムに組み込むことができる場合がある。

この地域は、もっとも貧困度の高い地域である。そして貧困と子どもの肥満はつながっており、ロンドン市において子どもの肥満度は最も高い地域の一つである。また世界のあらゆる民族が、世界のあらゆる問題を、この地域に持って移住してくる。一口で、サザークといっても、小さな地区に、それぞれの課題がある。たとえば、大きな精神科病院がある地区周辺には、ドラッグや、アルコール依存など、さまざまな病気のため入院し、この地区で生活する人々がいる。ある地区には、アフリカ人のコミュニティやソマリア人のコミュニティ、ベトナム人のコミュニティ、ラテンアメリカ人のコミュニティなど、さまざまな人種間の憎しみを持ちながら、すごく狭い地区で生活している。一方、すごく裕福

な人々が住んでいる地区もある。ここからも複雑なニーズが生まれている。たとえば、イギリスの白人が住んでいる地区は、人種差別をし、黒人と関わろうとしない人々もいる。このように、サザークという一つの地域の中に、あらゆる課題がある。

ホーム・スタート・サザークの理想は、私たちが、すべてのコミュニティにコミットし、関係を持つことで、さまざまなコミュニティのつながりをつくることである。またサザークには、ホーム・スタート以外にも、たくさんの支援活動がある。それらとの連携も必要である。だが、支援活動がたくさんあるだけでは、親は利用しようとしにくい（あるいはできない）。このような親は、チルドレンセンターにもアクセスしようとしにくい。ホーム・スタートは、家庭訪問型だからこそアクセスできる場合がある。

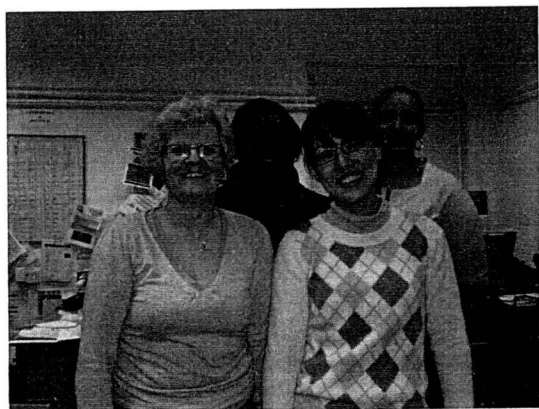
今後、料理を学ぶグループを作りたいが、資金不足である。家族をこのグループに連れてきて、栄養を学ばせ、買い物に連れて行き、料理し、試食し、それを家に持ち帰って、家事に役立ててほしい。そして家庭訪問し、定期的に子どもや家族の肥満を解消したい。

困っている親の多くは、他の組織から照会されて来る。もちろん、ホーム・スタートに、親を関わらせることは、簡単ではない。親は、「今日は忙しすぎる」や、「疲れている」など、いろいろな理由を言って断ってくる。親にとって、ホーム・スタートは、「チョイス」の一つではあるが、私たちは、できるだけ親と関係が持てるよう努力を続けていかなければならない。

4-1-3) 貧困地域におけるボランティアの専門性

ボランティアには、虐待防止の力量を必ずつけてもらうようにしている。ボランティアの研修をしても、複雑な家族を支えることができるボランティアと、できないボランティアがいる。ソーシャルワーカーとしての経験がある、あるいは自分も同じような経験をしたボランティアは、複雑な家庭にいきたがる場合がある。ボランティアは、どんな家庭に行きたいか選択することができる。コーディネーターは、ボランティアが活動をする前に、家庭の状況をできるだけ細かくボランティアに伝える。また、何かあったらいけないので、かならずコーディネーターが事務局に在籍しているときのみ、ボランティア活動をしてもらう。

ボランティアの活動の内容は、多岐にわたる。たとえば、難民として二人の子どもを連れて逃げてきた母親がいた。ボランティアが、彼女に、元気が出るために何がしたいかと聞いたら、「泳ぎたい」といった。ボランティアは、彼女を泳ぎにつれていった。この支援は、彼女にとってかなりのリフレッシュとなった。小さなことが、大きな差を生む。



ボランティアも家族も、もちろん完全ではない。いちばん最初の訪問は非常に大切である。最初につまずくと、そのあと改善することはまずない。たとえば、ボランティアの子どもが体調を崩し、訪問できないことがある。それは、仕方がない。しかし、ボランティアによっては、研修だけ受けて、ボランティアをしようとしらない人がある。家族とマッチングしようとする、いろいろな理由をつけて、ホーム・ビジティングをしようとしらない場合がある。家族は、これまでの人生で多くの失望を経験している。だから、支援する必要がある。それなのに、もしボランティアが一度でも家族を失望させるようなことがあれば、もうそのボランティアには活動をさせない。ボランティアの中には、かなりすぐれたボランティアもいる。研修を続けていると、どのような人がボランティアとして適切か、どのような人がボランティアとして信頼できるかわかってくる。またコーディネーターとして、ボランティアを信用しようと努力している。しかし、それでも時折、失望させられることがある。ボランティアの多くが、自分自身も人生で傷ついてきている人が多い。ボランティアは、家族と同じコミュニティから来ており、ボランティア自身も複雑な背景を抱えている。そのため、ボランティア自身のサポートが必要な場合もある。また、ボランティアの経験は、全国職業資格の単位となるため、その資格によって仕事をみつけるために、ボランティアの研修を受ける人もいる。12人研修を受けると、そのうち3～4人は、ボランティアに適していないし、本人も活動しようとしらない。ボ他の地域も同じような課題を抱えている。

ボランティアは、次のような理由から、ホーム・スタートを始めている。

<ボランティア A>

わたしは、ホーム・スタートにかかわっている友だちからこの活動を教えてもらい、自分もかかわろうと思いました。わたしは、10代で子どもを産みました。自分とおなじ立場の人たちを支援するため、この活動をはじめました。私自身同じ経験をしているので、固定観念なく、同年代の親にかかわることができます。さらに、この活動は、仕事にもつながるのではないかと考えました。

<ボランティア B>

カレッジのチューデントサポートで、この活動を知りました。以前、自分自身うつ状態があったので、同じ状態の人を助けられればよいと思いました。親が落ち込んでいるときに、話し相手になってあげたいと思っています。わたしは話すことと、子どもが好きです。このことが、人の助けになるのならうれしいです。関わることによって、自分自身の人生が豊かになりました。

4-2. Home-Start Lambeth (ホーム・スタート・ランベス)

(Unit 2 Holles House, Overton Road London, SW9 7JN Tel :020 7924 9292)

4-2-1) 概要

ランベス地域はロンドン市中央にあるサザークの左隣で、サザークに比較的似た地域である。ランベス北部、テムズ川の南側には、文化施設（劇場、コンサート会場等）、歴史的な重要建築物（ランベス宮殿）などの再開発地域がある。再開発地域以外は、犯罪の多さと治安の悪さでよく知られている。ランベスは、ロンドン市貧困度7位の貧困地域である。多くの住民が、小さな住居に住んでいて住宅は混み合っている。この地域は貧困が課題であり、生活するのに不利な立場の方々が多いので、国が多くチルドレンセンターを建設した。

ホーム・スタート・ランベスは、困難を抱えた幼い子どもたちを持つ家族支援に興味のある小さなグループによって、1998年に設立された。10年間、イギリスでもっとも疎外された地域の一つであるランベスの家族を継続的に支援してきた。この地域では、関係機関から照会される家族の90%以上は、少数民族である。この間、ホーム・スタート・ランベスは何百もの家族を支援し、スタッフによるホーム・ビジティング（家庭訪問）を行ってきた。2008年から2009年に、ホーム・スタート・ランベスは20家族に対して家庭訪問、約80家族を集団で支援する予定である。次の二年間はさらに増えることが予期されており、ランベスの各家庭にとって、ホーム・スタートは、唯一欠くことのできないサービスとなっている。確実な寄付団体は、ランベスCYPSだけである。その他、毎年、寄付申請をし、2009年に向けて、申請が通ったのは5か所ある（2008年度はどこも通らなかったが）。

4-2-2) 「照会」について

家庭内暴力は、イギリスにおいて、さらにランベスにおいても、とても大きな問題になっている。しかし、家に暴力的な家族がいるとわかると、ホーム・スタートの組織としては、ボランティアの安全のためにボランティアが、その家庭に行くことを勧めない。家族に、ホーム・スタートのファミリー・グループに来ていただいて、サポートする。時折、DVの家庭を、医者がホーム・スタートに照会し、コーディネーターが、家庭訪問をすることがある。そこで話を聞いて、家族がボランティアに来てほしいと思っているのか尋ねる。

ホーム・スタートの大きなキーワードは、「チョイス（選択）」である。家族は、「照会」されるが、かならずホーム・スタートを利用しなければならないわけではない。ソーシャルワーカーなどが家に来るのは強制かもしれないが、ホーム・スタートは公式ではなく、フレンドシップ（友だちになろう）ということ伝える。家族は、サービスを利用するかどうか選択ができるのである。ホーム・スタートの話をして、もし受け入れたければ受け入れればよいし、受け入れたくなければ受け入れなくて良いという。とにかく、問題を抱えているのは、自分だけではないということを、家族に分かってもらう。多くの人が問題を抱えていて、それは普通だということ伝える。家族を育て上げるのに、ルールはないので、やっつけて、時々、すごく大変に感じることもある。ホーム・スタートのリーフレ

ットことは、すごく親しみやすく書いている。目標は、家族が地域の人々を信頼し、頼ることができるようにすることである。

4-2-3) ボランティアの研修

ボランティアを訓練する方法は、ホーム・スタートが30年間蓄積してきたプログラムがある。また現在もさらに研修内容は深められている。ボランティアは40時間のコースを研修している。基本的にはスキームのコーディネーターが講師となるが、より専門的な内容については、外部講師に依頼する。

研修内容は、どうやって家族たちと関わりあうか、秘密厳守などを議論する。たとえば、どのようなことを秘密にすべきか。たとえば、「前科がある」ということを家族が話したらそれは当然秘密厳守となる。他に「妊娠してしまいました」ということを家族が言ったら、それは良いニュースなので、秘密厳守ではないと考えてしまう。しかし、妊娠についても、その家族が歓迎していないことかもしれない。その場合、秘密厳守となる。また16歳の息子がドラッグをしていることを家族が知ってしまった場合どうするか。この場合、16歳で息子が子どもで守るべき存在なので、秘密厳守ではなく、外部に言う必要がある。家族は、近隣の方に、自分がどのような課題を持っているか知られたくないし、ボランティアのことを信頼してほしいと考えている。いろいろなシチュエーションで訓練していく。

幼い子どもたちにとって、遊ぶことが大切だから、遊びについても学ぶ。家族によっては、かなり多くの人数の子どもがいる場合がある。その場合、子どもを遊ばせていない場合がある。その場合、ボランティアは、ただ子どもたちと遊んだり、絵本を読んであげたりすることがある。たとえば、家族は、字が読めなくて、絵本を読んでない場合や、英語が第一言語でない場合があるためである。

4-2-4) ボランティアの責任と専門性について

多くのボランティアはすごく熱心であるが、時々、ボランティアは責任を放棄することもある。だからこそ、ボランティアはまじめでなければならないこと、6カ月は必ず続けなければならないことを研修において伝える。コミットメントの原則、かかわりあいの原則について理解してもらおう。もし、家族が信頼しているボランティアが、家族を見捨て突然止めてしまうと、家族がどう感じるかをワークショップする。

ボランティアは、ホーム・スタートを経験し、家族支援の経験を得たいと思っている。その経験がキャリアとして、彼女らの職業につながる場合があるためである。イギリスでは、家族のサポートワーカーになる正式な資格がないので、経験が重要視されている。家族支援の経験を積んだら、コーディネーターとして就職できる場合がある。コーディネーターの職に就くと、勤務年限の制限はなく、その組織が続く限り働くことができる。

多くのボランティアは、研修を終えると、家族支援のことについてすべて知ったと思ってしまう。しかし、実際に現場に入り、家族支援を始めると、自分が知らないことがあま

りにも多いことに気づく。

ボランティアの研修を受けることのできる資格は、必ずしも家族がいるか、子育ての経験をしているかだけではなく、子育て支援の経験があるか、など各地域（各スキーム）で厳しさが違う。ただ、子どもと過ごした経験もなく、子育て支援の経験もない人には、他のボランティアを勧める場合が多い。ホーム・スタート UK の基準は厳しいが、いくらか地域裁量がある。地域が違くと課題や状況が違ってくるので、それに応じた対応をできる部分がある。たとえば、ランベスには多くの公共の交通機関がある。ランベスでは、ボランティアには、できるだけバスを使うように言っている。他の地域では、車を運転する必要がある場合が多い。そういう部分が違ってくる。またホーム・スタートは交通費のみ支給している。しかし多くのボランティアは、交通費も必要ないと言い、いつも提供しようとしてくれる。そのためそのお金で、たとえばボランティア全員の研修日の昼食を用意したり、ファミリー・グループのクリスマスでレストランに行った時に使ったりしている。

4-2-5) ホーム・スタートの意義およびコーディネーターの専門性について

コーディネーターは、ホーム・スタート・ランベスから賃金をもらっている。賃金の出所は、地元の自治体と、ランベス特別区からもらっている。この地域は貧困地域だが、地元の支援があるので、成り立っている。この地域には、確実に、ホーム・スタートの必要性がある。しかし、行政の支援がないと、十分な資金が集められない。そのため、このプロジェクトの素晴らしさを訴え、地方自治体を説得する必要がある。多くのホーム・スタートは、このような努力を積み重ねている。貧困地域と、家族の問題はつながっており、本来ならば、この地域にはもっと大きなホーム・スタートの組織が必要である。この地域のホーム・スタートは、家族の課題に比べて小さすぎる。もちろん、他にもいろいろな支援団体があるが、このように個別の家庭を無償で、しかも継続的に支援できるのはホーム・スタートだけである。子どもたちのトイレのしつけや、ふるまいなどを指導するファミリー・アクションという有償の家族支援がある。しかし、それらは5回程度しか家族を訪問できない。ホーム・スタートは、6カ月や1年、さらにはそれ以上の期間家族を支える。そして、ボランティアなので、ファミリー・アクションよりも、もっとフレンドリーである。ボランティアは、家族が何をすべきというリストを作っているわけではない。ただ、話を聞くだけの友だちである。ボランティア自身も地域の人なので、その家族が、地域のどのような資源とつながったらよいか知っている。

ホーム・スタートを地域に作るには、16個の基準がある。すべてがホーム・スタート UK の基準に達しなければならない。つまり、



現在ある、すべてのホーム・スタートは、よい品質を保っているということである。専門家ではなくボランティアが関わっているといても、コーディネーターは賃金をもらっていて、コーディネーターはプロフェッショナルになることが求められている。10年前はもっとインフォーマルであったが、いまはできるだけ専門的な力量が求められている。給料も、地域によって違うが、ふつう 25,000～30,000 ポンド（約 35 万円～42 万円程度：1 ポンド 140 円の場合）の賃金が支給されている。もちろんボーナスはないが、公共の部門で働いている人と同じくらいの給料をもらっている。一般的に、このようなチャリティのみで働いている人は、自分の時間を持ちたいと思う。わたしたちには、25日の有給休暇も用意されている。しかし、ホーム・スタートで働いている人々は、基本的に賃金を目当てに働いていない。たとえば、男性はあまりこのような仕事につかない。ホーム・スタートで仕事をしていると、今以上の昇給はない。それが男性にとって問題になるのかもしれない。ホーム・スタートで男性を見るのはめずらしい。また小さい子どもたちと仕事をすることもあるので、好まないのかもしれない。コーディネーターたちは、賃金のためではなく、家族が回復し幸せになるという、やりがいのために働いているのである。



4-3. Home-Start Camden (ホーム・スタート・カムデン)

(7 Dowdney Close Kentish Town London NW5 2BP Tel: 020 7424 1603)

4-3-1) 概要

ホーム・スタート・カムデンは、1994年に設立され、1995年から活動が始まった。

事務所は、ファミリー・リソース・センター (Camden Family Resource Centre) 内にあり、ほかの子育て支援団体と同居している。カムデンは、カムデントアウンのマーケット、

有名人が多く住む裕福な居住地、ドラッグ関連犯罪、売春地域として知られている。貧困ランク 12 位であり、貧困地域の部類にはいる。

カムデンのスキームは、専従職員 3 人と、パートタイム職員 3 人で運営されている。運営費および賃金は、ナショナルロータリー（宝くじ）などの補助金や寄付によってまかなっている。資金は、地元の自治体からの補助金はないため、3 年ごとにあらゆる寄付団体に申請して得ているため、資金集めは 3 年に 1 度の重要な課題である。

4-3-2) ボランティアの位置づけについて

ボランティアは、一週間で半日（4 時間）以上働かない。他の日は、自分の生活のために働いている。ボランティアをするためには、収入が必要である。土曜日、日曜日は、もちろん自分のためにも働かないし、ボランティアもしない。フルタイムでボランティアできるのは、裕福な家庭だけである。また利用者である家族が、ボランティアに依存しては、本来のこの活動の目的を達成できない。この活動の目的は、家族が、さまざまなサービス（ドロップイン、チルドレンセンター）にアクセスできるよう力をつけ、家族が独立するように支援するのが、この活動の目的である。

ボランティアは、孤独感にさいなまれていた家族に対して接触する。ボランティアは、家族が自分で地域とコミットできるように（コミュニティ精神を育むために）、家族と 1 週間に 1 回だけ会う。政府が国民に対して、強調している点は、国に精神的に頼らないということ。つまり、ボランティアが熱心なのは大切だが、熱心だからボランティアの賃金を保証しろというのは違う。ボランティアがフルタイムでボランティアの仕事をし、国に賃金を要求すると、国の財政を圧迫し、活動の自由度もなくなる。これは本末転倒である。イギリスでは、時間だけでなくお金もないとボランティアできない。たとえば、ボランティアになる人は、家庭で子どもを育てていて、働いていないので時間があるという方がボランティアすることができる。そのような人は、ボランティアを是非していただきたいと考えている。

利用者は、チルドレンセンターや医者などから照会を受け、その中の一定の人数が希望者となるが、ボランティアメンバーは、常に足りなかつたり、多すぎたりする。

ボランティアは、研修を受け、訓練され、審査される。ボランティアになるためには、子育て、あるいは子育て支援関係の経歴があるかどうか、前科のチェック、肉体的・精神的チェック、ソーシャル・サービスのチェックなどがされる。

4-3-3) 利用者について

親は、自分から来るというよりも、照会によってくるものがほとんどである。そしてその親が、利用したいかどうかを自分で選択する。照会先は、チルドレンセンターや医者やファミリーセンターなどである。この活動は、行政や関係団体と連携しないとできない。そのためにはアウトリーチをし、ネットワークを作る必要がある。